

異校種間の学びの連続性を重視した教育の推進（小中一貫教育） ～確かな学力の育成を目指した小中一貫教育における教育活動の工夫～

千葉県船橋市立小室小学校 吉田 浩一

I 現状と課題

1 現状認識

近年の児童生徒の発育・発達の様相が以前と大きく変化してきており、現在の小・中の学校制度は、必ずしも児童生徒の実態に合っていない、という指摘もある。そこで小中の垣根を取り払い、9年間を一貫したカリキュラムで編成・実施する小中一貫校の門戸が開かれた。全国的にも、小中一貫校での教育効果が高く評価され、小中一貫教育への風潮が高まっている、と言える。

船橋市の後期教育振興基本計画では、近隣の小・中学校がそれぞれの学校施設や組織などを維持しながら連携していく「施設分離型」の小中一貫教育を行おうとしている。本校は船橋市の小中一貫教育の研究指定を受け、平成 29 年度に公開研究会を終えた。小中一貫教育の教育効果を見据えながら、市の方針を念頭に、小室地域のよさが発揮されるよう、研究に取り組んだ。

2 課題分析・アプローチの視点

小室地域は、一小一中という特別な学区であり、小室小の児童は一部の児童を除き、ほぼ全児童が小室中に進学する。このような教育環境もあり、本小・中学校の児童生徒は、総じて素直で心優しく、共感的な人間関係を構築することができている。

しかし、確かな学力の育成という面においては課題があり、年度によってもその傾向は一様ではない。この課題を克服するためには、授業を児童生徒からの視点でとらえることが必要であると考え、全ての授業で児童生徒が主体となる学習活動を意識的に取り入れることとした。本小・中学校では、ペア学習やグループ学習など、他の学習者と交流することを基本とする学び合い学習を手立てとした本小・中学校独自の「わかる授業」を実践する必要があると考え、研究主題を「確かな学力の育成を目指した小中一貫教育における教育活動の工夫」～「わかる授業」の実践を通して～として設定した。

II 研究の概要

1 取組の視点

子どもの育ちの連続性を考慮した異校種間の接続

(1) 学力向上

小中で共通認識した「わかる授業」を実践するためのカリキュラムマネジメントにより、9年間を見通した指導を試みた。学習規律の統一や、学び合い学習などを実践し、小中のスムーズな接続と、学力の向上を目指した。

(2) 合同行事交流

小中合同マラソン大会や中学校の運動会への参加などの体育的行事を行い、音楽的行事では小中合同合唱団の結成や乗り入れ授業などを実施した。これらのことに

より、行事を合同で行う楽しさを味わわせたり、自己存在感や行事に取り組む主体性の向上を図った。

(3) 地域交流

地域の自然保護のための「ほたるの星プロジェクト」や避難所運営を通して、地域に目を向けることで、自己有用感の高まりをねらった。地域・保護者・学校の三者が、より連携できるような支援を心がけた。

III 成果と課題

1 成果

- (1) 「小中（文化）の違い」を乗り越え、小中の教職員が相互に理解し合う努力が継続している。
- (2) 本小・中学校の「わかる授業」が定着し、小中学校で一貫した学習スタイルを確立することができた。

2 課題

- (1) 児童生徒の相互交流及び児童生徒と地域間の交流と量的・質的な学力との相関関係を明らかにする。
- (2) 小中一貫教育研究に係わる取組において、教職員の負担感や多忙感の解消を図る。
- (3) 本小・中学校の小中一貫教育をより有意なものとするための教育課程の研究を進める。
- (4) 確かな学力の向上の下支えともなるべき家庭学習の在り方について追究する。

IV 提言

1 小・中学校の校長同士による学校経営方針等の共有

「小中（文化）の違い」を乗り越えるためにも、本研究では、小・中学校で「目指す子ども像」や「わかる授業」の概念を共有した。様々な小中交流行事を行うにあたって、まずは管理職同士が意見交換や情報交換を密に行い、互いの信頼関係を深めた。そういう姿勢を教職員に見せることで、風通しのよい組織づくりを目指した。また、「子どもたちのために」をキーワードに、目的の重要性を教職員に話し、小中相互の授業参観や小中の各種交流行事を行いながら、目的に合わせた評価を行った。これらを糸口として、教職員同士で「小中（文化）の違い」を乗り越え、小中の教職員が相互に理解し合う努力を今後も続ける。

2 保小連携の推進

本市では、平成 27 年 2 月の「船橋の教育—教育振興ビジョン及び後期教育振興基本計画」により、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の推進を掲げている。昨今は、特別な配慮の必要な児童や、家庭環境により影響を受けている児童が増えており、保育園との情報交換を含めた連携を数回にわたって進めている。このことによりここ数年、小学 1 年生のスタートがうまくきれており、そのメリットの大きさから保小連携の推進も強化する。